根源仏典
12

絶対の真理
に関係づけられた経典

Sacca-Saṁyutta

責任監修 真理の御魂（みたま） 最聖 麻原彰晃尊師

訳 サキャ神賢直説根原仏典翻訳チーム

根源仏典 12

絶対の真理
に関係づけられた経典

Sacca-Saṁyutta

責任監修 真理の御魂(おたま) 最聖 麻原彰晃尊師

訳 サキャ神賢直説根原仏典翻訳チーム

序

一九九二年四月に、わたしは、「関係づけられた経典の部門（サンユッタ・ニカーヤ）」の翻訳を世に出したいと考えた。しかしその計画は一年遅れ、九三年四月に現象化することができた。特に今月は、『道に関係づけられた経典』、そして『絶対の真理に関係づけられた経典』、そして『真理の流れに入ることに関係づけられた経典』の三冊を出すことができることは、わたしにとって大変な喜びである。

この『道に関係づけられた経典』の全体を読むことにより、サキャ神賢の教えがどのようなものであり、そして、それを実践することによりどのような利益があるのか、ということをわ

たしたちは如実に知ることができるだろう。

また、『絶対の真理に関係づけられた経典』を読むことにより、真理とは何であるか、つまり、サキャ神賢の説く真理とは何であるかを如実にわたしたちは理解することができるであろう。この『絶対の真理に関係づけられた経典』の内容は、現在、日本でいわれている「真理とは、聖なる八段階の道（八正道）である」と説く、他宗派の誤った見解を粉砕するに十分な内容であるということができる。つまり真理とは、「善・徳・寂静・法則の実践という四つの修行実践を土台とし、完全なる煩悩破壊を行ない、それによって、すべてが実体がないことを悟り得る道である。その方法である。そしてその結果である」ということを理解することができるからである。

また、『真理の流れに入ることに関係づけられた経典』によっ

て、帰依とは何であるか、信とは何であるかということを、わたしたちははっきりと理解することができるはずである。

この三冊の経典は、三冊セットで皆さんが読み、そして、記憶していただいたら、サキャ神賢の教えの全貌のかなりの部分を理解することができるはずである。

願わくばわたしと、わたしの翻訳チームの功徳が、すべての衆生を利しますように。そしてもし、万が一経典の過ちが生じた場合、そのすべてのカルマはわたしに還元されますように。

一九九三年　四月十六日

麻原彰晃

根源仏典 12

絶対の真理に関係づけられた経典
（サッチャ・サンユッタ）

目次

序 1

第一　サマディ品 14

【一】第一　サマディ 14
【二】第二　独居 16
【三】第三　善男子（一） 17
【四】第四　善男子（二） 19
【五】第五　出家修行者たちや祭司たち（一） 21
【六】第六　出家修行者たちや祭司たち（二） 23
【七】第七　種々の熟考 25

【八】第八　思念　27
【九】第九　論争の　29
【一〇】第十　会話　31

第二　法則の車輪の発生品　34
【一一】第一　真理勝者によって演説された（一）　34
【一二】第二　真理勝者によって演説された（二）　45
【一三】第三　集積　48
【一四】第四　境　51
【一五】第五　記憶実践（一）　53
【一六】第六　記憶実践（二）　56
【一七】第七　非神秘力　62
【一八】第八　神秘力　63
【一九】第九　解明　64
【二〇】第十　種々の真理　66

第二　コーティ村品　68
【一一】第一　神秘力（一）　68
【一二】第二　神秘力（二）　71
【一三】第三　最上正覚者　74
【一四】第四　供養値魂　76
【一五】第五　漏の破壊　78
【一六】第六　友達　79
【一七】第七　種々の真理　80
【一八】第八　世界　81
【一九】第九　理解できる、あるいは証智できる　83
【二〇】第十　ガヴァンパティ　84
第四　シッソノキの林品　87
【二一】第一　シッソノキ　87
【二二】第二　アセンヤクノキ　89
【二三】第三　棒　92
【二四】第四　身に着けている衣服　93

【三五】第五　百の槍　95
【三六】第六　種々の生き物　97
【三七】第七　太陽のたとえ話（一）　98
【三八】第八　太陽のたとえ話（二）　100
【三九】第九　神々の王のくい　102
【四〇】第十　教義を持す者たち　107

第五　がけ品
【四一】第一　思念　113
【四二】第二　がけ　117
【四三】第三　苦痛　122
【四四】第四　家の屋根　129
【四五】第五　穴の空間（一）　132
【四六】第六　暗黒　135
【四七】第七　穴の空間（二）　140
【四八】第八　穴の空間（三）　142
【四九】第九　完全無欠山（一）　144

【五〇】第十　完全無欠山（二）　146
第六　明察品　150
【五一】第一　爪の先　150
【五二】第二　蓮池　152
【五三】第三　一体になった（一）　154
【五四】第四　一体になった（二）　156
【五五】第五　大地（一）　158
【五六】第六　大地（二）　160
【五七】第七　海（一）　162
【五八】第八　海（二）　164
【五九】第九　山のたとえ話（一）　166
【六〇】第十　山のたとえ話（二）　168
第七品（車輪復誦）　171
【六一】第一　他の　171
【六二】第二　国境　173

【六三】第三　智慧　174
【六四】第四　蒸留酒であるアルコール　176
【六五】第五　水　177
【六六】第六　母に対する慈愛のある　178
【六七】第七　父に対する慈愛のある　179
【六八】第八　出家修行者の状態　180
【六九】第九　祭司の状態　181
【七〇】第十　敬意を払う　182

八　少なくやめられた　184
【七一】第一　生き物　184
【七二】第二　与えられないもの　185
【七三】第三　種々の愛欲における　186
【七四】第四　嘘の言い方　187
【七五】第五　中傷　188
【七六】第六　乱暴な　189
【七七】第七　軽薄語　190

【七八】第八　種子　194
【七九】第九　異なる時間において　192
【八〇】第十　香りのある化粧品　191

九　生の穀物復誦

【八一】第一　舞踏　196
【八二】第二　寝台　197
【八三】第三　銀貨　198
【八四】第四　穀物　199
【八五】第五　肉　200
【八六】第六　少女において　201
【八七】第七　女の奴隷　202
【八八】第八　ヤギと羊　203
【八九】第九　鶏と豚　204
【九〇】第十　象の群れ　206

十　より多くの生命体 208
【九一】第一　田畑 209
【九二】第二　売買 210
【九三】第三　使い 211
【九四】第四　秤をちょろまかすこと 212
【九五】第五　不正 213
【九六】第六　傷害 215
【九七】第七　殺害 216
【九八】第八　縛ること 217
【九九】第九　略奪 218
【一〇〇】第十　不法横領 219
【一〇一】第十一　暴力行為
十一　五つの方向 220
【一〇二】第一　五つの方向 220
【一〇三】第二　五つの方向 222
【一〇四】第三　五つの方向 222

【一〇五】第四　五つの方向　223
【一〇六】第五　五つの方向　223
【一〇七】第六　五つの方向　224
【一〇八】第七　五つの方向　224
【一〇九】第八　五つの方向　225
【一一〇】第九　五つの方向　225
【一一一】第十　五つの方向　226
【一一二】第十一　五つの方向　226
【一一三】第十二　五つの方向　227
【一一四】第十三　五つの方向　227
【一一五】第十四　五つの方向　228
【一一六】第十五　五つの方向　228
【一一七】第十六　五つの方向　229
【一一八】第十七　五つの方向　229
【一一九】第十八　五つの方向　230
【一二〇】第十九　五つの方向　230
【一二一】第二十　五つの方向　231

【二二二】第二十一　五つの方向　231
【二二三】第二十二　五つの方向　232
【二二四】第二十三　五つの方向　232
【二二五】第二十四　五つの方向　233
【二二六】第二十五　五つの方向　233
【二二七】第二十六　五つの方向　234
【二二八】第二十七　五つの方向　234
【二二九】第二十八　五つの方向　235
【二三〇】第二十九　五つの方向　235
【二三一】第三十　五つの方向　236

言語対比表

※『絶対の真理に関係づけられた経典（Sacca-Saṁyutta）』の翻訳は、Pali Text Society の『Saṁyutta Nikāya Vol.V』をテキストとした。なお、確実に誤植と思われるところは、（　）内で正しい言葉を補うことにした。

第十二　絶対の真理に関係づけられた経典（サッチャ・サンユッタ）

第一　サマディ品

【一】第一　サマディ

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊（せそん）はサーヴァッティ（すべてのものがある）のジェータ（勝利者）林にあるアナータピンディカ（貧しい人に施し物を与える人）の大庭園にとどまっておられた。そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男（こうぼんのうめつじんたがくなん）たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。

「尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディを修習しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディに入った向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。そして、何を如実に認識し理解するのであろうか。

三　『これは苦しみである』と認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディを修習しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、サマディに入った向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである。」

【二】第二　独居

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、独居において、専心し味わいなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、独居した向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。そして、何を如実に認識し理解するのであろうか。

三　『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、独居において、専心し味わいなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、独居した向煩悩滅尽多学男は、如実に認識し理解するのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三】第三　善男子（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送った善男子（ぜんなんし）たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得た。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送るであろう善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得るであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得る。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送った善男子たちはどんな人もすべて、まさにこれら四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得た。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送るであろう善男子たちはどんな人もすべて、まさにこれら四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得るであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理に対して如実な明察の結果を得る。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心す

べきである」と。

【四】第四　善男子（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察した善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察した。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察するであろう善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察するであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察している善男子たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察している。四つとは何であろう

か。

五　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察した善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察した。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察するであろう善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、正しく家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送り、如実に明察している善男子たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に明察している。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五】第五　出家修行者たちや祭司たち（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、如実に現正覚（げんしょうかく）した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚している。四つとは何であろうか。

苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理

を如実に現正覚している。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六】第六　出家修行者たちや祭司たち（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、如実に現正覚したことを説明した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明した。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚したことを説明するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、

四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明するであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、今、如実に現正覚したことを説明している出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明している。四つとは何であろうか。

苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚したことを説明した出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明した。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚したことを説明するであろう出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明するであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚したことを説明して

いる出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚したことを説明している。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七】第七　種々の熟考

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の悪不善の熟考を熟考してはならない。つまり、感覚の喜びの対象の熟考を、害心の熟考を、残酷の熟考をである。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの熟考は利益を伴わず、神聖行（しんせいぎょう）の最初では

なく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは熟考しつつ、『これは苦しみである』と熟考しなさい。『これは苦しみの生起である』と熟考しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と熟考しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と熟考しなさい。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの熟考は利益を伴い、これらは神聖行であり、これらは神聖行の最初であり、これらは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八】第八　思念

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、悪不善の思念を思念してはならない。

あるいは『世界は不滅である』と、あるいは『世界は滅亡である』と。あるいは『世界は有限の期間である』と、あるいは『世界は無限の期間である』と。あるいは『それは霊魂であり、それは肉体である』と、あるいは『霊魂は別であり、肉体は別である』と。あるいは『真理勝者（しんりしょうしゃ）は死後存在する』と、あるいは『真理勝者は死後存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在し、そして存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在することもなく、存在しないこともない』と。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは思念しつつ、『これは苦し

みである』と思念しなさい。『これは苦しみの生起である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と思念しなさい。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九】第九　論争の

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、論争の話を主張してはならない。『あなたはこの法則と修行を認識していないが、わたしはこの法則と修行を認識している。どういう訳で、あなたはこの法則と修行を認識するつもりであろうか。あなたは誤謬に従っており、わたしは正しく従っている。前もって発言すべきものを後に言い、後に発言すべきものを前もって言った。わたしの言行は一致しており、あなたの言行は一致していない。あなたによって慣習は改変された。あなたの教義は論破された。教義の履行のために、動き回って生活しなさい。あなたはたしなめられた。もし結果として生じるならば、否定しなさい』と。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この話は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは主張しつつ、『これは苦しみである』と主張しなさい。『これは苦しみの生起である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と主張しなさい。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、この話は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるからである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇】第十　会話

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、様々な動物の会話を主張してはならない。

つまり、国王の会話、無法者の会話、大臣の会話、軍隊の会話、恐怖の会話、清潔な会話、食べ物の会話、飲み物の会話、衣服の会話、寝台の会話、花飾りの会話、香料の会話、親族の会話、乗り物の会話、村の会話、町の会話、市の会話、地方の会話、女性の会話、男性の会話、蒸留酒の会話、道端の会話、かめの場所での会話、以前の低級霊の会話、雑多な会話、世界の物語を語ること、海の物語を語ること、このような生存非生存の会話、あるいはこのように。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、この会話は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは主張しつつ、『これは苦し

みである』と主張しなさい。『これは苦しみの生起である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と主張しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と主張しなさい。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、この会話は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第一　サマディ品

その経群

サマディ、独居、次の善男子が二つ、
出家修行者たちや祭司たち、種々の熟考、
思念、論争の、会話と。

第二　法則の車輪の発生品

【一一】第一　真理勝者によって演説された（一）

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はバーラーナシー（剣の城壁）のイシパタナ・ミガダーヤ（尊い人が降りた鹿の公園）にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は五人で集団をなしている向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしと共にいる出家者は二つの極端な状態に依存してはならない。二つとは何であろうか。

三　劣って、ありふれた普通の人のようであり、邪なることであり、不利益を被ることである、この種々の感覚の喜びの対象において、愛欲における豪華な生活をすることと、苦しみであり、邪なることであり、不利益を被ることである、こ

の自分自身の疲労の専念とである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、真理勝者はこれら双方の極端な状態を批判することなく、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる中間の方法を現正覚したのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、真理勝者が現正覚した、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる、その中間の方法とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解（しょうけんかい）・正思惟（しょうしい）・正語（しょうご）・正行為（しょうこうい）・正生活（しょうせいかつ）・正奮闘（しょうふんとう）・正記憶修習（しょうきおくしゅじゅう）・正サマディ（しょう）である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれが真理勝者が現正覚した、眼を引き起こし、精通を引き起こし、臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめる、その中間の方法である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの聖なる絶対の真理である。出生は同様に苦しみであり、老いは同様に苦しみであり、疾患は

同様に苦しみであり、死は同様に苦しみであり、種々の不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みは同様に苦しみである。敵意の人たちとのつきあいは苦しみであり、親愛な人たちとの別れは苦しみである。希望するものを得ないことは同様に苦しみである。要するに、五つのとらわれの集積は同様に苦しみである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理である。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である。それは、まさにその渇愛に対して、離愛著で残らず滅尽することであり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、

正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの聖なる絶対の真理を理解できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『理解した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理であ

る』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの生起の聖なる絶対の真理を捨断(しゃだん)できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『捨断した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの滅尽の聖

なる絶対の真理を現証（げんしょう）できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『現証した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

一三 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、これら四つの聖なる絶対の真理に対するわたしの三つの連続した十二の状態の如実精通見解が、このように正しく清浄でなかった限りは、向煩悩滅尽多学男たちよ、まさにその場合には、わたしは、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において、無上の最上正覚を現正覚したと公言しなかった。

一四 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、これら四つの聖なる絶対の真理に対するわたしの三つの連続した十二の状態の如実精通見解が、このように正しく清浄になったときから、向煩悩滅尽多学男たちよ、それでわたしは、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司

と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において、無上の最上正覚を現正覚したと公言した。したがって、わたしには精通と見解が生じたのである。『わたしの心の離解脱は不変であり、これは最後に残った生であって、今再び生存することがあることはない』と。」

一五　世尊はこれを演説なさった。大喜びした五人で集団をなしている向煩悩滅尽多学男たちは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだした。

そしてしたがって、この回答が話されているとき、聖者コンダンニャ（他人に熱中している人）には、塵（ちり）を離れ垢（あか）を離れた法則を理解する眼が生じた。「生起の法則であることは何でも、すべて滅尽の法則である」と。

一六　また、このように世尊が法則の車輪を発生なさったとき、地上愛欲神天（あいよくしんてん）たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上

の法則の車輪を発生なさった」と。

一七　地上愛欲神天たちの声を聞いて、四大王愛欲神天たちは声を口に出した。「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

一八　四大王愛欲神天たちの声を聞いて、三十三愛欲神天たちは声を口に出した。「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

三十三愛欲神天たちの声を聞いて、支配流転双生児愛欲神天たちは声を口に出した。「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上

の法則の車輪を発生なさった」と。

支配流転双生児愛欲神天たちの声を聞いて、除冷淡愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

除冷淡愛欲神天たちの声を聞いて、創造満足愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

創造満足愛欲神天たちの声を聞いて、為他神以神通創造欲望満足従事愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司

や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

為他神以神通創造欲望満足従事愛欲神天たちの声を聞いて、神聖衆愛欲神天たちは声を口に出した。

「世尊はバーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて、出家修行者や祭司や愛欲神や破滅天や神聖天や世界の中のだれによっても撃退されない、この無上の法則の車輪を発生なさった」と。

一九　このように確かに、その刹那、その瞬間、その瞬く間に、神聖天の世界まで声は昇った。そして、この一万の世界の要素は揺れ、震動し、激しくぐらつき、そして、無量で巨大な光明が、愛欲神たちの愛欲神の威神力を超越して世界に生じたのである。

二〇　直ちに、世尊は狂喜句を唱えられた。

「本当に、コンダンニャが認識した。本当に、コンダンニャが認識した」と。

このように確かに、聖者コンダンニャには、このアンニャータ（認識した）・コンダンニャと、まさに名前があった、と。

【一二】第二　真理勝者によって演説された（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの聖なる絶対の真理を理解できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『理解した』と、真理勝者方には、前世において伝

え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの生起の聖なる絶対の真理を捨断できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『捨断した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』

と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を現証できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『現証した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその苦しみの滅尽に至

る方法の聖なる絶対の真理を修習できる』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『修習した』と、真理勝者方には、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、智慧が生じ、神秘力が生じ、光が生じた」と。

【一三】第三　集積

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの聖なる絶対の真理とは何であろうか。それには、五つのとらわれの集積と発言できる。つまり、形状-容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの聖なる絶対の真理といわれる。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの生起の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、まさにその渇愛に対して、離愛著で残らず滅尽することであり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。向煩悩滅

尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理といわれる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理といわれる。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に聖なる絶対の真理である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一四】第四　境

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの聖なる絶対の真理とは何であろうか。それには、六つの心の中の境と発言できる。六つとは何であろうか。眼境・耳境・鼻境・舌境・身境・意識境である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの聖なる絶対の真理といわれる。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの生起の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、この再生に導き、喜悦であり、愛著につながれ、あれやこれやで喜びを見いだす渇愛である。つまり、愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの生起の聖なる絶対の真理といわ

れる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理とは何であろうか。それは、まさにその渇愛に対して、離愛著で残らず滅尽することであり、放棄であり、拒絶であり、解脱であり、欲望のないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理といわれる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理とは何であろうか。これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これが苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理といわれる。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽で

ある』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一五】第五　記憶実践（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、今、君たちはわたしの指し示した四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい」と。

三　このようにおっしゃられたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、わたしは実に、世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、さてどのように、君はわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのだろうか」と。

四「尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの第一の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。

尊師よ、このように、実にわたしは世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

五「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ。素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ、実に君はわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのである。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの第一の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。

六　向煩悩滅尽多学男よ、実にこのように、わたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきで

ある」と。

【一六】第六　記憶実践（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、今、君たちはわたしの指し示した四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい」と。

三　このようにおっしゃられたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、わたしは実に、世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、さてどのように、君はわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのだろうか」と。

四　「尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの第一の聖なる

絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマ（牛王）によって指し示されたこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの第一の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

五　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

六　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あ

るいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

七　尊師よ、実にわたしは、世尊によって指し示された苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を記憶実践いたします。尊師よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからです。

八　尊師よ、このように、実にわたしは世尊によって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践いたします」と。

九　「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ。素晴らしいことだ、向煩悩滅尽多学男よ、実に君はわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践するのである。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの第一の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの第一の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの第一の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦

しみの生起の第二の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの生起の第二の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマによって指し示されたこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽の第三の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にわたしによって苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理が指し示されたが、同様にそれを記憶実践しなさい。向煩悩滅尽多学男よ、というのは、出家修行者や、あるいは祭司が、『出家修行者ゴータマ

によって指し示されたこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理はない。わたしはこの苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理に拒絶反応を起こして、他の苦しみの滅尽に至る方法の第四の聖なる絶対の真理を示そう』と、このように断言することは何でも、この道理は存在しないからだ。

向煩悩滅尽多学男よ、実にこのように、君はわたしによって指し示された四つの聖なる絶対の真理を記憶実践しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一七】第七　非神秘力

二　直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼して、そばに座った。

三　そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。「尊師よ、非神秘力、非神秘力と演説なさいますが、尊師よ、いったい非神秘力とは何であり、そして、どのくらいの範囲まで非神秘力に及ぶのでしょうか」と。

四　「向煩悩滅尽多学男よ、実に苦しみにおける無精通、苦しみの生起における無精通、苦しみの滅尽における無精通、苦しみの滅尽に至る方法における無精通、向煩悩滅尽多学男よ、これが非神秘力といわれ、そして、それゆえに非神秘力に及ぶのである。

五　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきで

ある」と。

【一八】第八　神秘力

二　直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼して、そばに座った。

三　そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。「尊師よ、神秘力、神秘力と演説なさいますが、尊師よ、いったい神秘力とは何であり、そして、どのくらいの範囲まで神秘力に達するのでしょうか」と。

四　「向煩悩滅尽多学男よ、実に苦しみにおける精通、苦しみの生起における精通、苦しみの滅尽における精通、苦しみの滅尽に至る方法における精通、向煩悩滅尽多学男よ、これが神秘力といわれ、そして、それゆえに神秘力に達するのである。

五　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一九】第九　解明

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの聖なる絶対の真理である』と。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの生起の聖なる絶対の真理である』

と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理である』と。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と、わたしによって示された。そこでは、無量の色彩、無量の特徴、無量の解明がある。このように同様に、『これは苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である』と。

六　向煩悩滅尽多学男よ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二〇】第十　種々の真理

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの真理があり、異ならない真理があり、不可避がある。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。

四　『これは苦しみの生起である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。

五　『これは苦しみの滅尽である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。

六　『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と、これは真理であり、これは異ならない真理であり、これは不可避である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つは真理であり、異ならない真理であり、不可避である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第二　法則の車輪の発生品

その経群

真理勝者によって二つが演説され、
集積により、そして境によって、
記憶実践によって二つが演説され、
非神秘力、神秘力、解明、そして種々の真理と。

第三　コーティ村品

【二一】第一　神秘力（一）

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はヴァッジ（敬遠される）国のコーティ（端）村にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このようにこの大変長い間転生させられ生まれ変わらせられたのである。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみの聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このようにこの大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

苦しみの生起の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に目覚めることがなく、洞察がないゆえに、わたしそれのみならずそして君たちも、このように大変長い間転生させられ生まれ変わらせられた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、その結果、苦しみの聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に目覚め洞察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に目覚め洞察した。したがって、生存渇愛が断滅され、生存へと復活させる要因が破壊

され、今再び生存することがあることはない」と。

五　世尊はこれを演説なさった。これを演説した後、最上善逝（さいじょうぜんせい）である尊師は、そしてその上こう演説なさった。

「四つの聖なる絶対の真理を
如実に見ることがなく、
まさにそれぞれの生において、
大変長い間生まれ変わらせられた。
これらが見られたなら、
生存へと復活させる要因が根こそぎにされ、
苦しみの根本が断滅され、
今再び生存することがあることはない」と。

【二二】第二　神秘力（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解することがない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、向煩悩滅尽多学男たちよ、その出家修行者たちや、あるいは祭司たちは、わたしにあるいは出家修行者たちの中の出家修行者として崇拝され、あるいは祭司たちの中の祭司として崇拝されることはない。

そしてしたがって、その聖者たちは、出家修行者の状態から来る利益や、あるいは祭司の状態から来る利益を、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまることはないのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦し

みの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその出家修行者たちや、あるいは祭司たちは、わたしに出家修行者たちの中の出家修行者として崇拝され、それのみならずそして祭司たちの中の祭司として崇拝される。

そしてしたがって、この聖者たちは、出家修行者の状態から来る利益と祭司の状態から来る利益とを、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまるのである」と。

四　世尊はこれを演説なさった。これを演説した後、最上善逝である尊師は、そしてその上こう演説なさった。

一「苦しみを、
　および苦しみの起源を、

そしてすっかり苦しみの全部が、
打破されるところを認識せず理解せず、

二

そして苦しみの臨寂静に至る、
その道に気づかない者たちは、
心の離解脱はあきらめられ、
および智慧の離解脱や、
終極を行なうことはあり得ず、
偽りなく出生と老いに達する。

三

そして、苦しみを、
および苦しみの起源を、
そしてすっかり苦しみの全部が、

打破されるところを認識し理解し、

四 そして苦しみの臨寂静に至る、
その道を認識し理解する者たちは、
心の離解脱に恵まれ、
および智慧の離解脱や、
終極を行なうことはあり得、
出生と老いに達することはない」と。

【二三】第三　最上正覚者

一、二　サーヴァッティ。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何

であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚した状態から、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二四】第四　供養値魂

一　サーヴァッティ。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、過去の遍歴で、如実に現正覚した供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさった。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさるであろう。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさっている。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、過去の遍歴で、如実に現正覚した供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさった。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、未来の遍歴で、如実に現正覚するであろう供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさるであろう。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、今、如実に現正覚している供養値魂・最上正覚者方はどんな方もすべて、これら四つの聖なる絶対の真理を如実に現正覚なさっている。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二五】第五　漏の破壊

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしは気づいて見ることによって、漏の破壊を断言するのであって、気づかないで見ていないのではない。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、何を気づいて見ることによって、漏の破壊があるのだろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの生起である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの滅尽である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と気づいて見ることによって、漏の破壊がある。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこのように気づいて見ることによって、漏の破壊がある。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽で

ある』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二六】第六　友達

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く慈しみなさい。そして聴聞（ちょうもん）すべきことを考えさせなさい、友達や友人たちや親族たちや親類たちのだれでもを。向煩悩滅尽多学男たちよ、彼らは君たちによって、四つの聖なる絶対の真理に対して如実に明察することに鼓舞され、定着され、確立されなければならない。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く慈しみなさい。そして聴聞すべきことを考えさせなさい、友達や友人たちや親族たちや親類たちのだれでもを。向煩悩滅尽多学男たちよ、彼らは君たちによって、四つの聖なる絶対の真理に対して如実に明察することに鼓舞され、定着され、確立されなければならない。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二七】第七　種々の真理

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、これらは実に四つの聖なる絶対の真理であり、種々の真理であり、種々の異ならない真理であり、不可避である。この理由ゆえに、種々の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二八】第八　世界

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つと

は何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、愛欲神と共にあり、破滅天と共にあり、神聖天と共にある世界において、出家修行者や祭司と共にあり、愛欲神や人々と共にある弟子において、真理勝者は聖人なのである。この理由ゆえに、種々の聖なる絶対の真理といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【二九】第九　理解できる、あるいは証智できる

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの聖なる絶対の真理がある。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理・苦しみの生起の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理・苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの聖なる絶対の真理である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの聖なる絶対の真理には、理解できる聖なる絶対の真理があり、捨断できる聖なる絶対の真理があり、現証できる聖なる絶対の真理があり、修習できる聖なる絶対の真理がある。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、理解できる聖なる絶対の真理とは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみの聖なる絶対の真理は理解できる。苦しみの生起の聖なる絶対の真理は捨断できる。苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理は現

証できる。苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理は修習できる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三〇】第十　ガヴァンパティ

一　あるとき、多くの高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちは、チェーティ（思念）国のサハンチャニカ（小さな大喜びと共にある）にとどまっていた。

二　ところでそのとき、多くの高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちは、食事の後に、施し物のための巡回から戻り、先のとがった屋根のある円形の会館に一緒に座り集まり、この気晴らしの話が生じた。

「友よ、いったい苦しみをわかる者は、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかるのであろうか」と。

三　このように言われたとき、聖者ガヴァンパティ（牛の支配者）は、高弟たちである向煩悩滅尽多学男たちにこう言った。

「友よ、わたしはそれを世尊に直面して伺い、直面してお受けしました。

四　『向煩悩滅尽多学男たちよ、苦しみをわかる者は、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。苦しみの生起をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。苦しみの滅尽をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽に至る方法を同様にわかる。苦しみの滅尽に至る方法をわかる者は、苦しみを同様にわかり、苦しみの生起を同様にわかり、苦しみの滅尽を同様にわかる』と。」

第三　コーティ村品

その経群

二つのヴァッジ、最上正覚者、
供養値魂、漏の破壊、
友達、そして種々の真理、そして世界、
理解できる、ガヴァンパティと。

第四　シッソノキの林品

【三一】第一　シッソノキ

一　あるとき、世尊はコーサンビー（優雅な最高の人）のシッソノキの林にとどまっておられた。

二　直ちに、世尊は種々のかすかなシッソノキの葉を手で持って、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしの手で持たれた種々のかすかなシッソノキの葉と、あるいはこの最上部のシッソノキの林にあるものとでは、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、わずかなのは、世尊の手で持たれた種々のかすかなシッソノキの葉であり、なおまた、この最上部のシッソノキの林にあるもの、これらがまさにより多いのです」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、証智してわたしによって君たちに言明されなかったこと、これはまさにより多く、言明されたことはわずかである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、なぜこれはわたしによって言明されなかったのか。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、これは利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめないからである。この理由ゆえに、それがわたしによって言明されなかったのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、わたしによって言明されたのは何か。向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは苦しみである』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの生起である』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの滅尽である』と、わたしによって言明された。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と、わたしによって言明された。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、なぜこれはわたしによって言明されたの

か。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、これは利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるからである。この理由ゆえに、それが言明されたのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三二】第二　アセンヤクノキ

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理

を如実に明察せず、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは、種々のアセンヤクノキの葉、あるいは種々のヒマラヤマツの葉、あるいは種々のマラッカノキの葉の入れ物を作り、水やパルミラヤシの葉を持ってこよう』とこのように断言したなら、この道理が存在しないようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在しない。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの

滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在する。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは、種々の紅蓮華の葉、あるいは種々のハナモツヤクノキの葉、あるいは種々のつる植物の葉の入れ物を作り、水やパルミラヤシの葉を持ってこよう』とこのように断言したなら、この道理が存在するようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうだろう』とこのように断言したなら、この道理は存在する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三三】第三　棒

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、空中高く投げ飛ばした棒が、同様に一度根によって地に落ち、同様に一度真ん中で地に落ち、同様に一度先端で地に落ちるようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、種々の生命体は、非神秘力の障害である渇愛のきずなにより転生し生まれ変わって、同様に一度この世界から高い世界に行き、同様に一度高い世界からこの世界に来る。これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるの

である。四つとは何であろうか。

三　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三四】第四　身に着けている衣服

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、身に着けている衣服や頭が炎を上げて燃えているとき、なすべきことは何であろうか」と。

「尊師よ、身に着けている衣服や頭が炎を上げて燃えているとき、まさにその身に着けている衣服や頭を消すために、非凡な決意と奮闘と勉励と勤勇と不退転と記憶修習と正智がなすべきことです」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、炎を上げて燃えている身に着けている衣服や頭を無頓着に見て、作意せずに、明察されていない四つの聖なる絶対の真理に対して如実に明察するために、非凡な決意と奮闘と勉励と勤勇と不退転と記憶修習と正智とがなすべきことである。四つとは何であろうか。

四　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

【三五】第五　百の槍

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、百歳の寿命で、百歳の生命の男がいて、この者にこのように話しかけるようなものである。

『来なさい。いいかい、男よ、早朝にお前を百の槍で攻撃し、正午に百の槍で攻撃し、夕刻に百の槍で攻撃しよう。いいかい、男よ、実にそのお前は、毎日毎日三百回ずつの槍で攻撃されながら、百歳の寿命で、百歳生きていて、百歳を経過してから、明察されていない四つの聖なる絶対の真理を明察するだろう』と。

向煩悩滅尽多学男たちよ、思慮のある善男子は、実に達しなければならない。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の槍の一撃・種々の剣の一撃・種々の手斧の

一撃の無始の極めて以前の生まれ変わりが認識されず理解されないからである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このようにたとえそれが行なわれても、向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、わたしは、苦しみと共にあり激痛と共にある四つの聖なる絶対の真理に対して明察を断言しない。向煩悩滅尽多学男たちよ、その上わたしは、楽と共にあり幸福と共にある四つの聖なる絶対の真理に対して断言するのである。四つとは何であろうか。

四　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三六】第六　種々の生き物

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男がこのバラリンゴの大陸の中の草木や一片の木材や枝葉を切って、同じ場所にかき集め、同じ場所にかき集めると、先のとがったくいを作り、先のとがったくいを作ると、大海の中の種々の大きな生き物を種々の大きな先のとがったくいで刺し貫き、大海の中の種々の中間の生き物を種々の中間の先のとがったくいで刺し貫き、大海の中の種々の微細な生き物を種々の微細な先のとがったくいで刺し貫き、向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、大海の中には消費されていない種々の粗大な生き物がいて、それで、このバラリンゴの大陸の中のそれらの草木や一片の木材や枝葉の消費を消費し続けても、向煩悩滅尽多学男たちよ、現状では、大海の中には、種々の先のとがったくいで貫くことはたやすくない、実により多くの微細な生き物がいるようなものである。これはどうしてか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、姿の微細な本質によるのである。向煩悩滅尽多学

男たちよ、このように実に離別は大きい。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する魂は、実に大きな離別から完全に解脱して、見解を獲得しているのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三七】第七　太陽のたとえ話（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、太陽が昇天するとき、これに先立ち、この前兆

となるのは、すなわち日の出である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、四つの聖なる絶対の真理を如実に明察すること、これに先立ち、この前兆となるのは、すなわち正見解である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、正見解を持つ向煩悩滅尽多学男には、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する、これが望まれるべきである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三八】第八　太陽のたとえ話（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、月と太陽が世界に生じない限りは、その場合には、まさに大いなる光が生じることはなく、大いなる光明が生じることはなく、そのとき、目の見えないほどの闇があり、暗黒の暗がりがある。その場合には、まさに昼夜は認識されず理解されず、月と半月は認識されず理解されず、季節と一年は認識されず理解されない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、月と太陽が世界に生じるときから、それで大いなる光が生じることがあり、大いなる光明が生じることがあり、そのとき、目の見えないほどの闇がなく、暗黒の暗がりがない。それで、昼夜は認識され理解され、月と半月は認識され理解され、季節と一年は認識され理解される。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が流転なさらない限りは、その場合には、まさに大いなる光が生じることはなく、大いなる光明が生じることはなく、そのとき、目の見えないほどの闇が

あり、暗黒の暗がりがある。その場合には、まさに四つの聖なる絶対の真理に対して種々の明かすことがなく、種々の教えがなく、種々の認識させ理解させることがなく、種々の立証することがなく、種々の覆われたものを取り払うことがなく、種々の分別がなく、偏見のない要素の蓄積がない。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転なさるときから、それで大いなる光が生じることがあり、大いなる光明が生じることがあり、そのとき、目の見えないほどの闇がなく、暗黒の暗がりがない。なおまた、四つの聖なる絶対の真理に対して種々の明かすことがあり、種々の教えがあり、種々の認識させ理解させることがあり、種々の立証することがあり、種々の覆われたものを取り払うことがあり、種々の分別があり、偏見のない要素の蓄積がある。四つとは何であろうか。

六　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖

なる絶対の真理に対してである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【三九】第九　神々の王のくい

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺める。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、軽く、風にとらわれ、平坦な区域に置かれたキワタや木綿は、すぐに東の風が西にかき集め、西の風が東にかき集め、北の風が南にかき集め、南の風が北にかき集めるようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、木綿の軽さの本質によるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』

と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺める。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺めない。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、根元が深く、大変掘り返されており、確固として震動することがない鉄のくいや神々の王のくいがあって、たとえ同様に東の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に西の方角から

強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に北の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に南の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもないようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、神々の王のくいの根元の深さの状態によるのであり、大変掘り返されたことの本質によるのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、全く同様に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、

『この大家はきっと気づいて気づいていて、わかってわかっている。』と、他の出家修行者や、あるいは祭司の顔を眺めない。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して正しく実感した本質によるのである。四つとは何であろうか。

八 苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

九 向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四〇】第十　教義を持す者たち

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、なるほど、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する向煩悩滅尽多学男はどんな人も、たとえ同様に東の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に西の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に北の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に南の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、十六クック（長さの単位）の石の宮殿があって、その八クックが下で根元に至り、八クック根元に対して最上部で、たとえ同様に東の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に西の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するの

でもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に北の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもなく、たとえ同様に南の方角から強い風と降雨がこちらに来ても、それは揺れるのでもなく、震動するのでもなく、一緒に揺り動かされるのでもないようなものである。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、石の宮殿の根元の深さの状態によるのであり、大変掘り返されたことの本質によるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、なるほど、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する向煩悩滅尽多学男はどんな人も、たとえ同様に東の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共

にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に西の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に北の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り動かすだろうと、この道理は存在しない。

たとえ同様に南の方角から出家修行者や、あるいは祭司がこちらに来て、教義を欲しがり、教義を得ようとし、『彼の言い方を論破しよう』としても、確かに法則と共にある彼を、あるいは揺らし、あるいは震動させ、あるいは一緒に揺り

動かすだろうと、この道理は存在しない。

これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して正しく実感した本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第四　シッソノキの林品

その経群

シッソノキ、アセンヤクノキ、棒、
身に着けている衣服により、そして百の槍によって、
種々の生き物、太陽のたとえ話が二つの部分に、
神々の王のくい、そして教義を持す者たちと。

第五　がけ品

【四一】第一　思念

一　あるとき、世尊はラージャガハ（国王の家）の竹林にあるカランダカニヴァーパ（リスのえさ）にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、ある男がラージャガハから出かけて、世界の思念を思念しようと、スマーガダー（優れた香水の行商人）の蓮池（はすいけ）の所に行った。行くと、スマーガダーの蓮池の岸で、世界の思念を思念しつつ座った。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、その男はスマーガダーの蓮池の岸で、四部の軍隊が蓮の茎に入るのを見た。見ると、これがふと心に浮かんだ。

『まさしくわたしは気が狂っている。まさしくわたしは狂乱している。世界にあることがないものをわたしは見たんだ』と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、その男は市に入り、多くの人々の集まりに告げた。

『尊者たちよ、まさしくわたしは狂っています。尊者たちよ、まさしくわたしは狂乱しています。世界にあることがないものをわたしは見たのです』と。

『いいかい、男よ。ところで、どのようにあなたは気が狂ったんだ。そして、あなたが見た世界にあることがないものとは何なんだ』と。

五　『尊者たちよ、ここにわたしは、ラージャガハから出かけて、世界の思念を思念しようと、スマーガダーの蓮池の所に行きました。行くと、スマーガダーの蓮池の岸で、世界の思念を思念しつつ座りました。尊者たちよ、実に、わたしはスマーガダーの蓮池の岸で、四部の軍隊が蓮の茎に入るのを見たのです。尊者たちよ、実に、わたしはこのように気が狂い、このように狂乱し、そして、わたしが見たこれは、世界にあることがないのです』と。

『いいかい、男よ。事実のとおりに、あなたは気が狂っている。事実のとおりに

狂乱している。あなたが見たこれは、世界にあることがないのだ』と。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、その男は、まさにその真実で偽りでないものを見たのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、愛欲神と不飲酒天の戦いがたけなわであった。向煩悩滅尽多学男たちよ、その場合においては、その戦いにおいて、愛欲神たちが勝ち、不飲酒天たちが負けた。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、負けた不飲酒天たちはぎょっとし、まさに愛欲神たちに恐怖しながら、蓮の茎から不飲酒天の要塞（ようさい）に入ったのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから世界の思念を思念してはならない。

あるいは『世界は不滅である』と、あるいは『世界は滅亡である』と。あるいは『世界は有限の期間である』と、あるいは『世界は無限の期間である』と。あるいは『それは霊魂であり、それは肉体である』と、あるいは『霊魂は別であり、肉体は別である』と。あるいは『真理勝者は死後存在する』と、あるいは『真理勝者は死後存在しない』と、あるいは『真理勝者は死後存在し、そして存在しな

い』と、あるいは『真理勝者は死後存在することもなく、存在しないこともない』と。これはどうしてか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴わず、神聖行の最初ではなく、現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめることはないのである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、君たちは思念しつつ、『これは苦しみである』と思念しなさい。『これは苦しみの生起である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽である』と思念しなさい。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と思念しなさい。これはどうしてか。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、この思念は利益を伴い、これは神聖行の最初であり、これは現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべき

である。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四二】第二　がけ

一　あるとき、世尊はラージャガハのギッジャクータ（ハゲタカの峰）山にとどまっておられた。

二　直ちに、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「早く、向煩悩滅尽多学男たちよ。昼間の修行場のために、パティバーナクータ（会得の峰）の所に行こう」と。

「わかりました、尊師よ。」

と、実にその向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。

三　直ちに、世尊は多くの向煩悩滅尽多学男たちと一緒に、パティバーナクータの所に行った。実に、ある向煩悩滅尽多学男は、パティバーナクータで大きながけを見た。見ると、世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、これは確かに大きながけです。尊師よ、大変すさまじいがけです。尊師よ、いったいこのがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別のがけがあるでしょうか」と。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこのがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別のがけがある」と。

「尊師よ、さて、このがけよりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別のがけとは何でしょうか」と。

四　「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法で

ある』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老

いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生のがけに崩れ落ち、同様に老いのがけに崩れ落ち、同様に死のがけに崩れ落ち、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みのがけに崩れ落ちる。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみ

を見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦し

み・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生のがけに崩れ落ちず、同様に老いのがけに崩れ落ちず、同様に死のがけに崩れ落ちず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みのがけに崩れ落ちない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わたしは断言する。

六　だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四三】第三　苦痛

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『大きな苦痛』という名前の激苦地獄（げきくじごく）がある。そ

こでは、眼によって見る形状-容姿のどんなものも、まさに希望しない形状-容姿を見て、希望した形状-容姿を見ることは全くなく、まさに楽しまない形状-容姿を見て、楽しむ形状-容姿を見ることは全くなく、愉快でない形状-容姿を見て、愉快な形状-容姿を見ることは全くない。

耳によって聞く声のどんなものも、まさに希望しない声を聞き、希望した声を聞くことは全くなく、まさに楽しまない声を聞き、楽しむ声を聞くことは全くなく、まさに愉快でない声を聞き、愉快な声を聞くことは全くない。

鼻によってにおいをかぐ香りのどんなものも、まさに希望しない香りのにおいをかぎ、希望した香りのにおいをかぐことは全くなく、まさに楽しまない香りのにおいをかぎ、楽しむ香りのにおいをかぐことは全くなく、まさに愉快でない香りのにおいをかぎ、愉快な香りのにおいをかぐことは全くない。

舌によって味わう味のどんなものも、まさに希望しない味を味わい、希望した味を味わうことは全くなく、まさに楽しまない味を味わい、楽しむ味を味わうこ

とは全くなく、まさに愉快でない味を味わい、愉快な味を味わうことは全くない。

身によって接触する接触のどんなものも、まさに希望しない接触に接触し、希望した接触に接触することは全くなく、まさに楽しまない接触に接触し、楽しむ接触に接触することは全くなく、まさに愉快でない接触に接触し、愉快な接触に接触することは全くない。

意識によって識別する法則のどんなものも、まさに希望しない形状-容姿（法則）を識別し、希望した形状-容姿（法則）を識別することは全くなく、まさに楽しまない形状-容姿（法則）を識別し、楽しむ形状-容姿（法則）を識別することは全くなく、まさに愉快でない形状-容姿（法則）を識別し、愉快な形状-容姿（法則）を識別することは全くない」と。

三　このように演説されたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。「尊師よ、それは本当に大きな苦痛です。尊師よ、それは本当に大変大きな苦痛です。尊師よ、いったいこの苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさま

じい別の苦痛があるでしょうか」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、実にこの苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の苦痛がある」と。

「尊師よ、さて、この苦痛よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の苦痛とは何でしょうか」と。

四　「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、(同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して)、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生の苦痛によってあぶられ、同様に老いの苦痛によってあぶられ、同様に死の苦痛によってあぶられ、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの苦痛によってあぶられ

る。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至ら

しめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生の苦痛によってあぶられず、同様に老いの苦痛によってあぶられず、同様に死の苦痛によってあぶられず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの

苦痛によってあぶられない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わたしは断言する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四四】第四　家の屋根

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅

尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せずに、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在しない。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは家の屋根のすぐ前に家を造らずに、家の最上部を上に置こう』と、このように断言したなら、この道理は存在しないようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察せず、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察せずに、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在しないのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして実に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの

滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察し、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在する。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、『わたしは家の屋根のすぐ前に家を造って、家の最上部を上に置こう』と、このように断言したなら、この道理は存在するようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、『わたしは苦しみの聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの生起の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理を如実に明察し、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理を如実に明察して、完全に苦しみの終極を行なうであろう』と、このように断言したなら、この道理は存在するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽

である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四五】第五　穴の空間（一）

一　あるとき、世尊はヴェーサーリー（広大王によって造られた都市）の大林にある重閣講堂にとどまっておられた。

二　直ちに、聖者アーナンダ（快楽）は、早朝正装して、鉢と上衣を持って、食事として与えられる施し物のために、ヴェーサーリーに入った。

三　実に、聖者アーナンダは、多くのリッチャヴィ（表皮のない）の少年たちが、会議場で弓技を行ない、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放つのを見た。

四　見ると、彼にはこれがふと心に浮かんだ。

「これらリッチャヴィの少年たちは、確かに学んでいる。これらリッチャヴィの少年たちは、確かに正しく学んでいる。全く、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放ったからである」と。

五　直ちに、聖者アーナンダはヴェーサーリーで施し物のために歩き回り、食事の後に、施し物のための巡回から戻り、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者アーナンダは、実に世尊にこう申し上げた。

六　「尊師よ、ここにわたしは、早朝正装して、鉢と上衣を持って、食事として与えられる施し物のためにヴェーサーリーに入りました。尊師よ、実に、わたしは多くのリッチャヴィの少年たちが、会議場で弓技を行ない、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放っているのを見ました。見ると、わたしにはこれがふと心に浮かんだのです。『これらリッチャヴィの少年たちは、確かに学んでいる。これらリッチャヴィの

少年たちは、確かに正しく学んでいる。全く、次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放ったからである』と。」

七　「アーナンダよ、これについてどう思うか。次々に矢をしくじらせたことはなく、まさに遠くから微細な鍵穴の空間を通過させて矢を遠くへ放つことと、あるいは、百の部分に分裂させられたしっぽの毛の端から端を突き通すこととでは、よりなし難く、あるいはよりなし遂げ難いのは、いったいどちらであろうか」と。

「尊師よ、まさにこれは、百の部分に分裂させられたしっぽの毛の端から端を突き通すことが、まさによりなし難く、そしてよりなし遂げ難いのです」と。

八　「アーナンダよ、なおまた、より突き通し難いものを突き通す者たちが、『これは苦しみである』と如実に洞察し、『これは苦しみの生起である』と如実に洞察し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に洞察し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に洞察するのである。

九　アーナンダよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四六】第六　暗黒

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、このように大いなる如意と、このように大いなる威神力がある、これら月と太陽の光が分かち合えないところに同一に、暗黒の空間であり、制限がなく、暗黒であり、暗黒の暗がりである中世界がある」と。

三　このように演説されたとき、ある向煩悩滅尽多学男は世尊にこう申し上げた。「尊師よ、それは本当に大きな暗黒です。尊師よ、それは本当に大変大きな暗黒です。尊師よ、いったいこの暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさま

じい別の暗黒があるでしょうか」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、実にこの暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の暗黒がある」と。

「尊師よ、さて、この暗黒よりも、そしてより大きく、そしてよりすさまじい別の暗黒とは何でしょうか」と。

四 「向煩悩滅尽多学男よ、全く、『これは苦しみである』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの生起である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識せず理解せず、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識せず理解しない出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだし、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだす。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いだして、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持し、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持する。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、(同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して)、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持して、同様に出生の暗黒に崩れ落ち、同様に老いの暗黒に崩れ落ち、同様に死の暗黒に崩れ落ち、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの暗黒に崩れ落ちる。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱しない。苦しみから完全に解脱しないと、わたしは断言する。

五　向煩悩滅尽多学男よ、そして実に、『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解する出家修行者たちや、あるいは祭司たちはどんな人も、出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださない。

彼らは出生に至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、老いに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださず、死に至らしめる種々の経験の構

成に楽しみを見いださず、不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成に楽しみを見いださずに、同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持せず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しない。

彼らは同様に出生に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に老いに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に死に至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みに至らしめる種々の経験の構成の集積を所持しないで、同様に出生の暗黒に崩れ落ちず、同様に老いの暗黒に崩れ落ちず、同様に死の暗黒に崩れ落ちず、同様に不運な出来事・悲嘆・苦しみ・激痛・悩みの暗黒に崩れ落ちない。

彼らは、出生、老い、死、種々の不運な出来事、種々の悲嘆、種々の苦しみ、

種々の激痛、種々の悩みから完全に解脱する。苦しみから完全に解脱すると、わたしは断言する。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四七】第七　穴の空間（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大海で一つの穴の空間のあるくびきを中に置いたとしよう。そこで同一に、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がる盲目の亀がいるとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。実は同一に、その盲目

の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることがあるだろうか」と。

「尊師よ、きっとあるときいつかその条件では、大変長い間が経過してからでしょう」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、その盲目の亀が、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることはより早く、向煩悩滅尽多学男たちよ、しかしながら、一度破滅に至った愚者から人々の状態は早くないと、わたしは断言する。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここでは、法則の実行、寂静の実行、善を行なうこと、功徳を行なうことがなく、向煩悩滅尽多学男たちよ、ここでは、お互いに食べることや弱い者を食べることが続けて行なわれるからである。これはどうしてか。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。

苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四八】第八　穴の空間（三）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、この大いなる大地が一つの水であり、そこで男が一つの穴の空間のあるくびきを中に置くと、すぐに、東の風は西にか

き集め、西の風は東にかき集め、北の風は南にかき集め、南の風は北にかき集めるとしよう。そこで、百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がる、その盲目の亀がいるとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。実は同一に、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れることがあるだろうか」と。

「尊師よ、その盲目の亀が百の雨季の間ごとが経過してから一度ずつ浮き上がり、まさにその一つの穴の空間のあるくびきに首を入れるということ、これは思いもよらないことです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、人の状態を得ること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転なさること、これは思いもよらないことである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように、真理勝者が説き明かされた法則

と修行が世界に顕著になること、これは思いもよらないことである。

五　そして、彼にこの人間の状態が得られ、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が世界に流転し、真理勝者が説き明かされた法則と修行が世界に顕著になっているのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【四九】第九　完全無欠山（一）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が山の王・完全無欠山に対して、七つの緑豆ぐらいの小石を近くに置いたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。置かれた七つの緑豆ぐらいの小石と、山の王・完全無欠山とでは、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち山の王・完全無欠山であって、わずかなのは、近くに置かれた七つの緑豆ぐらいの小石です。近くに置かれた七つの緑豆ぐらいの小石は、山の王・完全無欠山と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五〇】第十　完全無欠山（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、山の王・完全無欠山が、七つの緑豆ぐらいの小石を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残った七つの緑豆ぐらいの小石では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたものであり、わずかなのは、残った七つの緑豆ぐらいの小石です。残った七つの緑豆ぐらいの小石は、山の王・完全無欠山の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至ら

ない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第五　がけ品
その経群

思念、がけ、苦痛、
家の屋根、暗黒があるのを、
そして穴の空間によって二つが演説され、
次の完全無欠山が二つと。

第六　明察品

【五一】第一　爪の先

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得

した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五二】第二　蓮池

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、全長五十ヨージャナ（長さの単位）、幅五十ヨージャナ、高さ五十ヨージャナの蓮池があり、いっぱいで、水が岸と同じ高さであり、カラスが飲める。これから男がクサ草の先端で水を引き上げたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。クサ草の先端で引き上げられた水、あるいは蓮池における水では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち蓮池における水であって、わずかなのは、クサ草の先端で引き上げられた水です。クサ草の先端で引き上げられた水は、蓮池における水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得

した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五三】第三　一体になった（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、これらの大きな河、つまり、ガンガー（大変速い河）、ヤムナー（双子の河）、アチラヴァティー（すぐ必要とされる河）、サラブー（沼地の存在）、マヒー（大いなる大地の河）が混合し集まる所で、これから男が二あるいは三の水の滴を引き上げたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。二あるいは三の引き上げられた水の滴、あるいは一体になった水では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち一体になった水であって、わずかなのは、二あるいは三の引き上げられた水です。二あるいは三の引き上げられた水は、一体になった水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです。」

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得

した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五四】第四　一体になった（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、これらの大きな河、つまり、ガンガー、ヤムナー、アチラヴァティー、サラブー、マヒーが混合し集まる所で、その水が二あるいは三の水の滴を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。完全に破壊され、消費され一体になった水、あるいは残されている水の滴では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、完全に破壊され、消費された、一体になった水であり、わずかなのは、残されている二あるいは三の水の滴です。残されている二あるいは三の水の滴は、完全に破壊され、消費され、一体になった水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得

した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五五】第五　大地（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大いなる大地に、七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉を近くに置いたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉です。近くに置かれた七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、

完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五六】第六　大地（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、大いなる大地が、七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。大いなる大地の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、大いなる大地の完全に破壊され、消費されたものであり、わずかなのは、残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉です。残されている七つのナツメの実の果実の堅い種ぐらいの小さい玉は、大いなる大地の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五七】第七　海（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が大海で一あるいは三の水の滴を引き上げたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。一あるいは三の引き上げられた水の滴、あるいは大海における水では、いったいどちらがより多いだろうか。」

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大海における水であって、わずかなのは、一あるいは三の引き上げられた水の滴です。一あるいは三の引き上げられた水の滴は、大海における水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に

破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五八】第八　海（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、大海における水が、二あるいは三の水の滴を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。完全に破壊され、消費された大海における水、あるいは残されている二あるいは三の水の滴では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、完全に破壊され、消費された大海における水であり、わずかなのは、残されている二あるいは三の水の滴です。残されている二あるいは三の水の滴は、完全に破壊され、消費された大海における水と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、

完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【五九】第九　山のたとえ話（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、男が山の王・雪山に対して、七つのカラシの種子ぐらいの小石を近くに置いたとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石、あるいはこの山の王・雪山では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち山の王・雪山であって、わずかなのは、近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石です。近くに置かれた七つのカラシの種子ぐらいの小石は、山の王・雪山と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に

破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六〇】第十　山のたとえ話（二）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、山の王・雪山が、七つのカラシの種子ぐらいの小石を除いて、完全に破壊し、続けて消費したとしよう。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたもの、あるいは残されている七つのカラシの種子ぐらいの小石では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち、山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたものであり、わずかなのは、残されている七つのカラシの種子ぐらいの小石です。残されている七つのカラシの種子ぐらいの小石は、山の王・雪山の完全に破壊され、消費されたものと比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、聖なる多学の弟子で、見解を獲得した魂が徹底的に明察された状態で、まさにこのより多くの苦しみは、すなわち、

完全に破壊され、消費されている。わずかで残されているものは、以前の完全に破壊され、消費された苦しみの集積、すなわち、最高七回流転と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らない。

そして、彼は『これは苦しみである』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの生起である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽である』と如実に認識し理解し、『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と如実に認識し理解するのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第六　明察品

その経群

爪の先、蓮池、
次の一体になったが二つ、
大地が二つ、海が二つ、
そして、二つの山のたとえ話と。

第七品　（車輪復誦）

【六一】第一　他の

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれた、そのかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人々として新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、人々から他の新しい生存に生まれ変わるこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六二】第二　国境

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、種々の大陸の中央で新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、種々の大陸の国境における識別することのできない者である未開人たちの中で、新しい生存に生まれ変わ

る、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六三】第三　智慧

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、さて全く同様に、聖なる智慧の眼を賦与された

それらの生命体はわずかだが、なおまた、非神秘力に至って理性を失っているこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六四】第四　蒸留酒であるアルコール

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、蒸留酒であるアルコールで酔わせて怠惰にする道理を自制しているそれらの生命体はわずかだが、なおまた、蒸留酒であるアルコールで酔わせて怠惰にする道理を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六五】第五　水

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、乾いた土地から生じるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、水から生じるこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六六】第六　母に対する慈愛のある

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、母に対する慈愛のあるそれらの経（生命体）はわずかだが、なおまた、母に対する慈愛のないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六七】第七　父に対する慈愛のある

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、父に対する慈愛のあるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、父に対する慈愛のない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六八】第八　出家修行者の状態

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、出家修行者の状態があるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、出家修行者の状態がない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【六九】第九　祭司の状態

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、祭司の状態があるそれらの生命体はわずかだが、なおまた、祭司の状態がないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七〇】第十　敬意を払う

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、一族の徳の高い者に敬意を払うそれらの生命体はわずかだが、なおまた、一族の徳の高い者に敬意を払わないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

品　経群

他の、国境、智慧によって、
蒸留酒であるアルコール、水、
母に対する慈愛のある、そして父に対する慈愛のあると、
出家修行者の状態、神聖な人、敬意を払うと。

八　少なくやめられた

【七二】第一　生き物

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、殺生（せっしょう）を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、殺生を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

【七二】第二　与えられないもの

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、与えられないものを強奪することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、与えられないものを強奪することを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七三】第三　種々の愛欲における

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、種々の愛欲における邪悪な行為を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、種々の愛欲における邪悪な行為を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七四】第四　嘘の言い方

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、嘘の言い方を自制しているそれらの経（生命体）は少ないが、なおまた、嘘の言い方を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真

理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七五】第五　中傷

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、中傷の言葉を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、中傷の言葉を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対し

て、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七六】第六　乱暴な

四「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、乱暴な言葉を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、乱暴な言葉を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七七】第七　軽薄語

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、軽薄語を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、軽薄語を自制していない種々の生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七八】第八　種子

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、草木の種子の群を損傷することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、草木の種子の群を損傷する

ことを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【七九】第九　異なる時間において

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、異なる時間の食べ物を自制してい

るそれらの生命体は少ないが、なおまた、異なる時間の食べ物を自制していないこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八〇】第十　香りのある化粧品

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、香りのある花飾りである化粧品を身につけ装飾して飾ることの道理を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、香りのある花飾りである化粧品を身につけ装飾して飾ることの道理を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

品　経群

生き物、与えられないもの、種々の愛欲における、
嘘の言い方、そして中傷、
乱暴な、軽薄語、種子、
異なる時間において、香りのある化粧品と。

九　生の穀物復誦

【八二】第一　舞踏

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、舞踏・歌・器楽・見せ物を見ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、舞踏・歌・器楽・見せ物を見ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽

である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八二】第二　寝台

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、上等の寝台や大きな寝台を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、上等の寝台や大きな寝台を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきで

ある。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八三】第三　銀貨

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、金貨・銀貨を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、金貨・銀貨を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八四】第四　穀物

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、生の穀物を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、生の穀物を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真

理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八五】第五　肉

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、生肉を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、生肉を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対し

て、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八六】第六　少女において

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、婦人・少女を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、婦人・少女を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八七】第七　女の奴隷

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、男女の奴隷を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、男女の奴隷を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八八】第八　ヤギと羊

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、ヤギと羊を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、ヤギと羊を受け取ることを自制し

ていない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【八九】第九　鶏と豚

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、鶏と豚を受け取ることを自制して

いるそれらの生命体は少ないが、なおまた、鶏と豚を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九〇】第十　象の群れ

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、象・牛・雄馬・雌馬を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、象・牛・雄馬・雌馬を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

第三の品　経群

舞踏、寝台、銀貨、
穀物、肉、少女において、
女の奴隷、そしてまさに、ヤギと羊、
鶏と豚、象の群れと。

十　より多くの生命体

【九二】第一　田畑

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、田畑と屋敷を受け取ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、田畑と屋敷を受け取ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

【九二】第二　売買

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、売買を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、売買を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽

である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九三】第三　使い

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、使いにやったり行ったり専念することを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、使いにやったり行ったり専念することを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九四】第四　秤をちょろまかすこと

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、秤（はかり）をちょろまかしたり、銅貨をちょろまかしたり、寸法をちょろまかすことを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、秤をちょろまかしたり、銅貨をちょろまかしたり、寸法をちょろまかすことを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった

本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九五】第五　不正

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、不正・ごまかし・詐欺・不誠実な行為を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、不正・ごまかし・詐欺・不誠実な行為を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。

これはどうしてか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九六】第六　傷害

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、傷害を自制しているそれらの生命

体は少ないが、なおまた、傷害を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九七】第七　殺害

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、殺害を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、殺害を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九八】第八　縛ること

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、縛ることを自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、縛ることを自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【九九】第九　略奪

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、略奪を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、略奪を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇〇】第十　不法横領

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、不法横領を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、不法横領を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇二】第十一　暴力行為

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、暴力行為を自制しているそれらの生命体は少ないが、なおまた、暴力行為を自制していない、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

十一　五つの方向

【一〇二】第一　五つの方向

二　直ちに、世尊はかすかな泥を爪の先の上に置き、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。わたしによって爪の先の上に置かれた、このかすかな泥、あるいはこの大いなる大地では、いったいどちらがより多いだろうか」と。

「尊師よ、まさにそのより多いのは、すなわち大いなる大地であって、わずかなのは、世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥です。世尊によって爪の先の上に置かれたかすかな泥は、大いなる大地と比べると、同様に数えられず、同様に比較に至らず、同様に全体の中のほんの一部の断片に至らないのです」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい

生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心すべきである」と。

【一〇三】第二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇四】第三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇五】第四　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇六】第五　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇七】第六　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、人から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、人から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一〇八】第七　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一〇九】第八　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一一〇】第九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、これらの生命体はより多いのである。

【一一一】第十　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一二】第十一　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一三】第十二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、愛欲神の所から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、愛欲神の所から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一四】第十三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一五】第十四　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一六】第十五　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一七】第十六　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一八】第十七　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一一九】第十八　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、激苦地獄から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、激苦地獄から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二〇】第十九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二二】第二十　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二三】第二十一　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二三】第二十二　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二四】第二十三　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二五】第二十四　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、動物としての発生から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、動物としての発生から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二六】第二十五　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二七】第二十六　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二八】第二十七　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで人々において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一二九】第二十八　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで激苦地獄において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一三〇】第二十九　五つの方向

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで動物としての発生において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。

【一三一】第三十　五つの方向

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、低級霊域から死んで愛欲神たちの所において新しい生存に生まれ変わるそれらの生命体は少ないが、なおまた、低級霊域から死んで低級霊域において新しい生存に生まれ変わる、まさにこれらの生命体はより多いのである。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの聖なる絶対の真理に対して実感しなかった本質によるのである。四つとは何であろうか。

五　苦しみの聖なる絶対の真理に対して、苦しみの生起の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理に対して、苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理に対してである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、『これは苦しみである』と専心すべきである。『これは苦しみの生起である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽である』と専心すべきである。『これは苦しみの滅尽に至る方法である』と専心

すべきである」と。

七　世尊はこれを演説なさった。大喜びしたその向煩悩滅尽多学男たちは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだした。

生の穀物復誦。

車輪復誦は完結した。

経群

田畑、そして売買を、使いを、秤をちょろまかすことを、殺害によって、そして、不法横領・暴力行為。

少ない者たちにより、それらがやめられた。

なおまた、まさにこれらのより多くの生命体が存在する。

五つの方向、その品がそれによって著しく言われると。

第十二　絶対の真理に関係づけられた経典

道、覚醒、記憶修習、そして潜在性、
正しい努力、そして能力、そして如意によって、
アヌルッダ、静慮（じょうりょ）、正しく説明された、
流れによって、絶対の真理、世尊は説明なさった。

大品の関係づけられた経典はやり遂げられた。

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
餓鬼→低級霊

阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天
他化自在天→為他神以神通創造欲望満足
従事天
悪魔→破滅天

色界→形状界
梵天→神聖天
梵衆天→神聖衆愛欲神天
梵輔天→神聖臣天
大梵天→大神聖天
浄天→美天
遍浄天→総美愛欲本質神天
広果天→偉大果報愛欲本質神天
浄居天→清潔居住天
無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天
善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮提→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者

善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟

声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々-八つの宗教的特性を持つ人々

預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）

阿羅漢→供養値魂

四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの聖なる絶対の真理
苦聖諦→苦しみの聖なる絶対の真理
集聖諦→苦しみの生起の聖なる絶対の真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理

四念処→四つの記憶修習の現象化

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足、四神足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習正覚段階
択法覚支→法則の検討正覚段階
精進覚支→精進正覚段階
喜覚支→喜正覚段階
軽安覚支→静寂正覚段階
定覚支→サマディ正覚段階
捨覚支→無頓着正覚段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い経験の構成の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉悔蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状・容姿
声→声
香→香り
味→味

触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底

十二縁起の法→十二の条件生起の段階
無明→非神秘力
行→経験の構成
識→識別
名色→心の要素・形状・容姿
六処→六つの感覚要素と対象
触→接触
受→感覚
愛→渇愛
取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→滅少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊

一種者→一つの種子を持つ者
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱

殺生→殺生（変更なし）
偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘の言い方

綺語→軽薄語
悪口→乱暴な言葉
両舌→中傷の言葉
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス

麻原彰晃の世界 PART21

麻原彰晃、戦慄の予言

この恐怖の世紀末——君は生き残れるのか!?

驚異的な的中率を誇り、注目を集めてきた麻原彰晃尊師の未来予言。大反響を呼んだPART1に続いて、またもや今回、衝撃の未来予言が続々と明らかにされた。今後の大型経済不況、想像を絶する新兵器が飛び交う人類最終戦争の様相、さらにはそのさ中に登場するキリストの役割や、ユダヤ勢力、世界的秘密結社との戦い等、世紀末の地球の姿が壮大なスケールで浮き彫りとなった。動乱の世紀末を生き残りたい人には必読の一冊!

B6判 定価七七〇円

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師

あなたに絶対の幸福を約束する

――オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ修行体系

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ修行体系

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ修行体系

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

根源仏典12
資料請求券

正統派上座部仏教の再現

テーラヴァーダ修行体系

『サキャ神賢直説根源仏典』翻訳の成果がここに！

わかりやすい法則と経典があるからこそ、実践可能な在家での正しい修行。正確な法則と経典があるからこそ、実現する在家での解脱と悟り。 テーラヴァーダ修行体系は麻原尊師の説かれる深遠な法則と完璧に翻訳された『サキャ神賢直説根源仏典』を学び、心の成熟・智慧の向上を目指す方に最適の修行体系です。

テーラヴァーダの智慧の真髄

『仏典研究』

麻原彰晃尊師説法、『サキャ神賢直説根源仏典』、高弟の成就体験談と盛りだくさんで、オウム真理教の教義が満載。仏典ファン、真理の探究者には見逃せない中味の濃い月刊誌です。

テーラヴァーダ修行体系を選択された方に、毎月お届けいたします。

根源仏典

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師と、
オウム真理教『サキャ神賢直説根源仏典』
翻訳チームが総力を結集。
これがパーリ語『大蔵経』の世界！

綿密・厳密・正確なパーリ語研究の成果と
麻原尊師の純粋観照智によって訳語を決定。

発刊開始!!

サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）がお説きになった真理の教えを、
意味の取りやすい、わかりやすい用語で再現。

形骸化した既存の仏教の妄説を打ち破り、難解なだけで何の役にも立たない
学者の観念を超え、躍動する本物の仏教の世界が今ここに！

2600年前のサキャ神賢の言葉が、今、正確に甦る……！

第1期シリーズ

①道に関係づけられた経典 …… Magga-Saṁyutta 既刊
②覚醒段階に関係づけられた経典 …… Bojjhaṅga-Saṁyutta
③記憶修習の現象化に関係づけられた経典…Satipaṭṭhāna-Saṁyutta
④潜在性に関係づけられた経典 …… Indriya-Saṁyutta
⑤正しい努力に関係づけられた経典…Sammappadhāna-Saṁyutta
⑥能力に関係づけられた経典 …… Bala-Saṁyutta
⑦如意の基礎に関係づけられた経典…… Iddhipāda-Saṁyutta
⑧アヌルッダに関係づけられた経典 …… Anuruddha-Saṁyutta
⑨静慮に関係づけられた経典…… Jhāna-Saṁyutta
⑩入出息に関係づけられた経典…… Ānāpāna-Saṁyutta
⑪真理の流れに入ることに関係づけられた経典…Sotāpatti-Saṁyutta 既刊
⑫絶対の真理に関係づけられた経典 …… Sacca-Saṁyutta 既刊

（以下続刊）

キミはもう尊師を聴いたか?

オウム真理教のラジオ放送

エウアンゲリオン・テス・バシレイアス

――真理の教えは全世界へのべ伝えられる

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師の声があなたの耳を直撃!
今、オウム真理教では、日本全国に、
そして全世界に向けては英語で、毎日ラジオ放送を行なっています。
その名も「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」。
ギリシャ語で「御国の福音」という意味です。
その名に違わず、番組内容は魅力たっぷり。
ラジオから流れ出る"福音"は、きっと、あなたの心をときほぐし、
安らぎを与えてくれるでしょう。
そして、明日への新たな活力を与えてくれるに違いありません。

主な番組内容

- 真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師説法
- 麻原尊師のノストラダムス秘密の大予言
- わたしは見た! これが尊師の超越神力
- 仏典を楽しもう!

その他にも興味の尽きない内容が盛りだくさん!

日本全国どこでも AM1476kHz

22:15～1:15

英語放送 (17, 770kHz, 17, 860kHz他)

5:30～6:00, 13:30～14:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介する便利なテレフォンサービスをぜひご利用ください。
TEL 03 (5450) 3602

※タイアップマガジン『えんじょい・はぴねす』定期購読受付中!

※詳しいお問い合わせは「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03 (5450) 6037

好評！ あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、〝オウム真理教ネット〟

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、
いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

オウム真理教 ネット

電子掲示板
- 最新情報！ オウム真理教
- 尊師説法
- ジャータカ仏典
- なんでも人生相談
- 予言・占いコーナー
- フリートーク

電子会議室
- オウム真理教ってどんなとこ？
- わたしの神秘体験
- オウム真理教のラジオ放送について
- ザンゲの部屋

電子メール
- あなたの気にいった相手に

チャット
- 画面を通して解脱者とさあ 語ろう

フリーソフト
- 尊師画像
- 真理紙芝居
- 転生うらないゲーム

などなど

〝オウム真理教ネット〟のご紹介

TEL番号	03-5450-5580(4回線) Tri-P利用可能 (CXAUMNET)
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BIT-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、SYSOPあてメールにて申請

面倒な手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント(『えんじょい・はぴねす』最新号)をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17
〝オウム真理教ネット〟事務局 TEL 03-5450-3554

オウム出版刊行案内

尊師説法集　麻原彰晃の世界

麻原彰晃の世界　PART1
幸福に至る四つの実践
B6判　二五〇〇円

尊師説法集第一弾。仏教の基本ともいえる「四預流支」を縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人はもちろんのこと、幸福な人生を求める人に本当の生き方を指し示す。

麻原彰晃の世界　PART2
尊師、麻原彰晃が斬る！
B6判　九八〇円

願望成就の秘法、UFO＆宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手鹿島とも子さんとの対談も加わってますます充実。

麻原彰晃の世界　PART3
真実、六道輪廻
B6判　九八〇円

六道とは、輪廻とは……。麻原尊師と高弟たちの瞑想体験が証明する六道輪廻の真実。大霊界、チャネリングなどの間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

麻原彰晃の世界　PART4
宗教にだまされるな！
B6判　九八〇円

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい意味を説き示す麻原尊師。本当の幸福と心の安らぎを得たいあなたに。

麻原彰晃の世界　PART5
すべてを解き明かすカルマの理法がここに
絶対の真理
B6判　九八〇円

なぜ幸福なのか？　なぜ不幸なのか？　運命の鍵を握る“カルマの法則”。すべての人がこの法則に支配されていることを豊富な実例が証明！　この一冊があなたを幸福に導く。

麻原彰晃の世界　PART6
今生と来世を幸せに生きるウッタマダンマここに公開！
願望成就の秘法
B6判　九八〇円

思いのままに人生を生きられたらどんなに素晴らしいことだろう……。心からの幸福を願うすべての人々に、麻原尊師が仏教の願望成就の秘法をそっと伝授する。

麻原彰晃の世界　PART7
仏教真理・八正道
B6判　八〇〇円

原始仏教の根幹をなす教え「八正道」。仏教の基礎ともいえるサキャ神賢直説の教えを、麻原尊師が正確かつ現代人にわかりやすく説く。従来の仏教解説書では得られない生き生きとした教えを再現！

麻原彰晃の世界　PART8
仏教真理・六波羅蜜
B6判　八〇〇円

在家修行者の修行を飛躍的に進める六つの極限「六波羅蜜」。「八正道」と並び、仏教の根幹をなす教えを、ただ一人の最終解脱者麻原尊師が正確かつ鋭く、わかりやすく説いた。

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ９

尊師、聖地インドを行く

Ｂ６判　七五〇円

サキャ神賢悟りの地、初転法輪の地、入滅の地等を巡りながら、麻原尊師が真理の法を説く。仏教発祥の地、インドで説かれた尊師の教えの集大成登場！　サキャ神賢のヴァイブレーションを受けて、最高の奥儀もここに公開される。

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ10

仏教真理・五蘊無我

Ｂ６判　六五〇円

あなたを絶対幸福へと導く仏教の真髄（五蘊）を浄化し、愛欲界を超えてブラフマンの世界へ、そして、最終的には完全に止滅し、不死へと至る教えを集大成した瞑想家待望の書。

わたしたちを構成する五つの要素

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ11

自己を超えて神となれ！

Ｂ６判　八二〇円

大人気を呼んだ尊師大学講演会待望の書。

東大をはじめ京大、気象大など、九一年の大学祭で大反響を巻き起こした麻原尊師講演会。その、仏教のエッセンスを巧みに説いた講話に加え、人気を博した質疑応答も掲載した話題の書。

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ12

仏教真理・十二縁起

Ｂ６判　六二〇円

サキャ神賢が説かれた、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜へと至る「十二縁起の法」。このプロセスを自ら体験された最終解脱者・麻原尊師が、詳細に解き明かす「十二縁起の法」の真実。

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ13
麻原尊師インタビュー特集

これが尊師！

Ｂ６判　五七〇円

麻原尊師が最終解脱者の純粋叡智によって、宗教・人生論・宇宙観・科学など、あらゆる分野にメスを入れる。「朝まで生テレビ」にも出演し、話題を呼んだ尊師の生の声を一挙掲載！

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ14

宗教の条件

Ｂ６判　五七〇円

これがオウム真理教

今、本物が明らかになる！　真の宗教の条件とは？　宗教ブームといわれる中、様々な宗教団体の中から間違いないく本物の宗教を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ15

絶対幸福への道

Ｂ６判　六二〇円

仏教実践における在家幸福への道

最終解脱者・麻原尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！　あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載された在家修行者座右の書、ついに登場！

麻原彰晃の世界　ＰＡＲＴ16

麻原彰晃　方便品

Ｂ６判　七二〇円

難解な仏教の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！　麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

麻原彰晃の世界　PART17

世界は尊師を待っている

B6判　一〇三〇円

ロシアで、そしてスリランカで、人種を超え、文化を超え、イデオロギーを超えて多くの人々の共感を得た講話と、高僧との対談を一挙掲載。今、尊師の説かれる「宇宙の絶対的法則」は、世界に響きわたろうとしている。

麻原彰晃の世界　PART18

世紀末の危機を乗り越えるために

THE説法 I

B6判　六七〇円

九二年六月に全国主要都市で行なわれた尊師講演会での説法を一挙に公開。「〝解脱〟が二十一世紀の日本を、そして世界を背負う！」――新しい時代の文明理念を明らかにした、待望の一冊。

麻原彰晃の世界　PART19

初公開！

タントラ・ヴァジラヤーナ最高の教え

THE説法 II

B6判　五七〇円

本来ならば直弟子にしか明かされない秘儀、タントラ・ヴァジラヤーナの高度な内容も惜しみなく公開。激動の時代において絶対不動の自己を確立させてくれる麻原尊師の説法の集大成。

麻原彰晃の世界　PART20

麻原彰晃、戦慄の予言

B6判　六二〇円

君は人類最終戦争を生き残れるのか？

恐怖に満ちた近未来の予言と同時に、その世紀末の破局を生き抜くためにはどうすればいいのか、真理の御魂最聖　麻原彰晃尊師がその確かな指針を示す現代人必読の書。

麻原彰晃の世界　スペシャル

約束の大地

B5判　オールカラー　一二〇〇円

インド・チベット・ラオス……。仏教ゆかりの地を尊師・麻原彰晃が行く。それぞれの国の光と影を見つめながら。尊師が初めて明かす高度な瞑想・秘儀の数々。その魅力を結集したファン待望の一冊。

真理探究者の必読書をあなたに

最聖 麻原彰晃尊師の本

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

増補改訂版

B6判　一八〇〇円

八年の歳月を経て修行の最終地点に立たれた尊師が解脱への道程を克明に語りかける不朽のベストセラーが、増補改訂されて新登場！　麻原尊師の教えに導かれ、生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、解脱のプロセスに沿って掲載。

イニシエーション

B6判　二一六三円

本来ならば選ばれた弟子にのみ伝授される秘儀を惜しみなく公開。さらに今日の日本と世界の動向を正確に予言している驚くべき記述の数々。真理探究者があなたを真実の世界へと導く。

大乗ヨーガ経典

マハーヤーナ・スートラ

B6判　三〇九〇円

解脱とは？　解脱の真の意味合いとは？　多くの人々が求めてやまなかった解脱の真理が実体験として証明された。ここに示された解脱へのステップ、史上稀に見る解脱の体験談がすべてを語っている。

マハーヤーナ・スートラ PART2

B6判　二一〇〇円

「南伝大蔵経」に遺されたサキャ神賢の教えと真理を現代に甦らせる尊師の説法。そして、法にのっとって実践した弟子たちの体験談。読んで、考え、実践するための「本物のお経」がここに。

すべてが思いのままになる

超能力秘密の開発法 新・増補大改訂版

B6判　一二六〇円

超能力のつかない修行はニセモノだ！すべてが思いのままになる超絶無尽の神秘の力があなたのものに。驚異の神秘力を有する麻原尊師が、秘密の修行を惜しみなく公開！

癌・エイズだって怖くない!!

超能力秘密のカリキュラム 健康編・改訂版

B6判　一一〇〇円

アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、西洋医学の限界を破る治療法を病名別に詳しく紹介。さらに、超健康体・超能力をもたらし、霊性を飛躍的にアップさせる秘儀を満載。

原始仏典講義一

A5判　二五〇〇円

どんな学者も修行者も説き明かせなかったサキャ神賢の真理の法を、最終解脱者・麻原彰晃尊師が鋭く解説。いにしえの真実が、ここに生きた教えとして復活した！

幸福の科学の会員よ聞きなさい！

真実の仏陀の教えはこうだ！

B6判　九八〇円

こんなにも違う、真の仏陀の教えと幸福の科学大川隆法の教え。すべての仏典を熟知した最終解脱者・麻原彰晃尊師が大川流仏法の大ウソをズバリと正す。

百問百答

B6判　九八〇円

「人生うまくいかないな」とお嘆きのあなた。すべてを知り尽くした麻原尊師が、"運命転換の道"をあなたに伝授。突然に幸福を得た人々の体験があなたに希望の灯火を。

甦るクンダリニー・ヨーガ文明

古代エジプトの秘儀を解く

B6判　六六〇円

神秘の国エジプトで麻原尊師が発見した驚くべき真実。ピラミッド、スフィンクス、ヒエログリフ……。あまたの古代遺跡は、何を語りかけていたのか？封印されたエジプト古代文明の謎が、今解き明かされる！

色別恋人判定法

A5判　オールカラー　一五〇〇円

心や智性が発する色と光を、修行によって身につけたスーパー・パワーで自在に見ることができる麻原尊師が、だれでも簡単にできる色別恋人判定法を伝授！色の好みで、あなたの恋人の性格・人生をピタリと当てる！

麻原彰晃尊師説法集

ハイエスト・ダンマ

B6判　二〇〇〇円

サキャ神賢が最初にお説きになった「四諦十二縁起の法」をはじめとして、八正道などを含めた仏教の柱、七科三十七道品の詳細な説明、数々の瞑想の奥儀まで、麻原尊師の深遠な法が随所に展開されている上級者向けの一冊。

最聖　麻原彰晃尊師のベスト26

シンセ音楽をたのしもう

A4変形判　オールカラー　一〇〇〇〇円

真理の記憶修習の第一歩は歌から始めよう！　尊師が作詞・作曲された二十六曲すべてに尊師ご自身が解説をされた、愛蔵版歌曲集。

真理勝者　絶対最勝の法則

タターガタ・アビダンマ

すべての真理を内在した史上最強の法則

第一輯品

大宇宙の実相・改訂版

B6判　一三〇〇円

麻原尊師の修行体験と原始仏教などをベースに確立されたオウム真理教の教義をやさしく教えるオウム真理教入門書第一弾！　真実の宇宙観と魂の法下のプロセスを詳述する。

第二輯品

真理勝者の救済計画

B6判　五五〇円

日本で初めて、サキャ神賢が説いた全体系が明らかにされる！　魂が救済されていくプロセスと解脱への道程を段階的に詳しく紹介。わたしたちの歩むべき道を的確に指し示す最高の教えが満載！

第三輯品

サキャ神賢の至高信徒の実相

B6判　一五〇〇円

あの真理勝者サキャ神賢の時代、果たして在家の信徒たちはどのような修行をしていたのか？　悩める現代人に贈る、麻原尊師からのメッセージ。

第四輯品

真理のすべて

B6判　二〇〇〇円

サキャ神賢が説かれた「真理の法則」のすべてを、麻原尊師がここに明かす！　あの「初転法輪（法則の車輪の発生）」を含む「諦相応（絶対の真理に関係づけられた経典）」が、日本初のパーリ原典完全訳でついに登場！

キリスト教のすべてを明かす

キリスト宣言

今世紀最後の救世主・麻原彰晃尊師が明かす、イエス・キリストの真実

PART1

キリストの教えのすべてを明かす

B6判　五五〇円

これがイエスの真実だ！　世にはびこる偽キリストたちを粉砕する衝撃の書。この一冊でイエス・キリストのすべてがわかる！

PART2

再臨・裁き・終末

B6判　五五〇円

神の審判のとき、この世は破滅する――。「聖書」にまつわる破局の様相が、今ここに明かされる。イエス・キリストの大予言をいよいよ解説！　わたしたちの未来はいかに？

PART3

偉大なグル、キリスト

B6判　一一〇〇円

大好評のシリーズ第三弾。仏教・密教・ヨーガの修行を究めた尊師だからこそわかる、これがイエスの説いた神聖世界の教えの真実！

PART4

イエスの真理の法則を解く

B6判　一〇五〇円

イエス・キリスト自身にその出現を予言された"真理の御魂"最聖・麻原彰晃尊師だからこそわかる「新約聖書」解釈。大好評のシリーズ第四弾は、さらに深く仏教的見地からキリスト教を分析。

あなたの持っている本当の力

超越神力

人の魂に宿っている力——それを発現させるものを修行という

PART1

天耳通・他心通

B6判　九八〇円

神々の声や遠くの音を聞くことのできる天耳通。他人の心を手に取るように読んでしまう他心通。今明らかになるこの超越神力のすべて。修行によって、あなたもこの素晴らしい力を持つことができる。

PART2

前生を知れ！死生智の秘密

B6判　九八〇円

無始の過去から輪廻転生を繰り返しているわたしたちの魂。瞑想によってサマディ（三昧）に入ったとき、様々な前生の記憶が甦る。本書では、麻原尊師の興味深い前生体験を満載！

PART3

完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通

B6判　五五〇円

智慧の解脱、心の解脱で心のけがれを完全に破壊した最終解脱者だけが知る"完全なる絶対なる神の叡智"とは？　最後の超越神力、漏尽通の秘密が今明らかになる。

PART4

わたしは見た！これが尊師の超越神力

B6判　五七〇円

あなたは信じられるか？　まさに超越神力と呼ぶにふさわしい超能力の数々を見せる麻原彰晃尊師。その超越神力を目の当たりにした内弟子たちの生の声を豊富に掲載。

悟りわたる仏陀の声

仏陀からのメッセージ

原始仏典の翻訳で明らかにされた衝撃の真実

PART1

創世期

B6判　一二〇〇円

宇宙創造と人類誕生の真実を、仏教最古の経典「創世期経」と最終解脱者・麻原彰晃尊師の叡智によってここに開示！　人類にとって最大の謎が、今鮮やかに説き明かされ、わたしたちの前に真実の姿を現わした。

PART2

人類滅亡の真実

B6判　九八〇円

滅亡の真実を克明に説き明かす、真理勝者サキャ神賢と最終解脱者・麻原彰晃尊師が贈る人類啓蒙の書。果たして我々人類は滅亡するのだろうか？　救われる道は？　今再び仏陀からのメッセージが届いた。

大予言をズバリ解明

麻原尊師の予言解読書

1999年の謎
ノストラダムス秘密の大予言

B6判　六〇〇円

「黙示録大予言」の秘密のベールを剥ぐ

滅亡の日

B6判　一八五四円

「黙示録大予言」完全解読

滅亡から虚空へ

B6判　一九〇〇円

真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師のズバリ回答集

尊師に聞く！

各巻ともB6判　六〇〇円

1　真理入門編／2　人生開拓編

ついに封印を解くべきときが来た！自らの神秘力によって様々な奇跡を見せた麻原尊師が明かす衝撃の真実。はるかなる時間を経て今甦るノストラダムス——。その恐るべき秘密を知ったとき、あなたは……

「聖書」の秘儀中の秘儀といわれ、その難解さゆえに多くの論議の的になってきた「ヨハネの黙示録」。麻原尊師が、その謎を徹底的に解説。人類滅亡のシナリオの封印が解かれた。

前著「滅亡の日」で明らかにされた大破局の後に来る新たなる戦いとは？だれにも解けなかった予言書のすべてが、今初めて明らかにされる。「ヨハネの黙示録」衝撃の全貌！

知っているようで知らないことに満ちているこの世界。心の内側の探究や宇宙を貫く大原則なくしては本当のことはわからない——。そう気づき始めた現代人の疑問にズバリ答える、麻原尊師の質疑応答集！

故事成語がズバリわかる

もりもり智慧のわく書

各巻ともB6判　五五〇円

1　韓非子編①
2　韓非子編②
3　韓非子編③／荀子編①
4　荀子編②

故事成語に見る人生の真実を、麻原彰晃尊師がズバリ解説。故事成語の奥の奥が見えてくる、もりもり智慧のわく座右の書。

パーリ語文法入門書

PALI MADE EASY

パーリ　メイド　イージー

A5判　一八〇〇円

Ven. E. Ānanda Maitreya Mahānāyaka Thera, D.Litt. 著

スリランカ最高の叡智、アーナンダ・マイトリー高弟が、難解とされてきたパーリ語文法をわかりやすく解説。豊富な例と例題で実力が養える。仏典を原典で学びたい方には必携のパーリ語入門書。

本部・各支部ご案内

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部　03(5467)2745
〒107　東京都港区南青山7-5-12
マハーポーシャビル2,3F
世田谷道場　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5
杉田村松ビル1F
杉並道場　03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4
井口ビル2F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目
19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町
1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1
HDビル6F
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町
下稲荷前1081-5
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2
コスモ伊勢佐木長者町ビル204
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20
ソフトオフィスビル2+4 2F
松本支部　0263(28)7429
〒399　長野県松本市芳川野溝527-3
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41
東伸ビル2F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14
万国ビル3F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り
松原上ル五軒町384 松本ビル2F

大阪支部　06(251)4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15
マルイビル1F,B1F
堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42
和歌山酒販会館2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18
和田ビル3F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8
安藤ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前
2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098 (869) 7707
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12
嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3
プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor),
New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300
Bonn 1, S.R.Germany
スリランカ支部（AUM SACCA
SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha,
Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A
Petrozavodskaya ul. Moscow,
125475 Russia

根源仏典12
絶対の真理に関係づけられた経典
（サッチャ・サンユッタ）

一九九三年七月二十日　初版発行

定　価　八〇〇円
責任監修　真理の御魂（みたま）最聖　麻原彰晃尊師
発行者　松本知子
　　石井久子
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―一七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三九）六〇四三
振　替　東京二―一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© His Holiness the Master, Shoko Asahara 1993
ISBN4-87142-084-1 C0315 P800E

根源仏典 12

絶対の真理
に関係づけられた経典
Sacca-Saṁyutta

ISBN4-87142-084-1 C0315 P800E
定価800円(本体776円)